

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870826

研究課題名(和文) 明治期の初等修身教科書に採用された寓話・童話・昔話のエートス分析的研究

研究課題名(英文) An Ethos analysis of Aesop's Fables, the Grimm Brothers' Fairy Tales and Japanese Folk Tales in moral education textbooks of the Meiji Period

研究代表者

坂本 麻裕子(SAKAMOTO, MAYUKO)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・助教

研究者番号：40648317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は明治期の修身教育イデオロギーがどのように形成されていたかを明らかにするため、修身教科書に掲載された口承文芸の変容と伝記テキストとの関連を考察した。研究方法は、全国に散在している修身教科書を調査し分析した。結果は次の3点である。1)小学校の修身教科書に掲載されたイソップ寓話・グリム童話・日本昔話の新しいテキストは見つからなかった。2)文部省がつけた付箋は、日本の神話に関連する修正が多い傾向が示唆された。3)イソップ寓話と関連付けられていた二宮金次郎の伝記は、徐々に「父-子」から「母-子」へと結びつきを強めていくことがわかった。寓話と伝記の関連性を考察するための伝記側の資料を整えられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the evolution of oral literature that was published in moral education textbooks, and its relation with autobiographies of significant figures of that time. Data collection from markings by Japan's Ministry of Education on moral education textbooks revealed that there may have been many modifications of Japanese myths. In addition, the biographies of Ninomiya Kinjiro from various textbooks in the Meiji period demonstrated how the father-child relationship had gradually shifted to the mother-child relationship, which can also be linked to the author's findings from earlier related studies on the relationship between the ethos of Aesop's Fables and that of Ninomiya Kinjiro's biographies. These findings can thus be further applied to examine the relationship between fables and biographies in future.

研究分野：文化学

キーワード：修身教育 明治文化 寓話 童話 昔話

1. 研究開始当初の背景

明治期日本の修身教育や教科書に関しては、教育史において膨大な先行研究の蓄積がある。しかし、修身教科書のテキストそのものに注目した研究は少ない。この点に注目し、これまでも申請者は、修身教科書に現れた寓話・童話・昔話のテキストの変容から、当時の道徳的解釈を分析することにより、明治期日本の修身教育イデオロギー形成の諸相を明らかにしてきた。本研究では、次の二点を意義とし、資料調査および修身教科書のテキストの変容を追った。

(1) 第一の意義：国定教科書以前の修身教科書のテキストについては、資料が全国に散在している。そのため、研究が進んでいない。申請者は、この時期に注目する。

(2) 第二の意義：これまで修身教科書に掲載された寓話・童話・昔話は、教科書史、児童文学研究など各分野で考察されてきた。本研究では、修身教科書に掲載されたイソップ寓話・グリム童話・日本昔話のテキストを、修身教育に利用された口承文芸という新たな視座から捉え、調査と分析を行うこととした。

2. 研究の目的

(1) 開始当初から立てていた第一の目的：本研究は、明治期の小学校の修身教科書に掲載された寓話・童話・昔話(口承文芸)の変容および文部省が付けた朱書き(重要文化財)を分析し、口承文芸の修身教育利用に関するイデオロギー分析を試みる。資料は国定教科書以前(明治初年～36年)に絞り、当時受容されたイソップ寓話とグリム童話、日本昔話を対象とする。分析対象は、次のように定義する。

対象時期	国定以前(=国定へ収斂していく明治初期から明治30年代)
対象教科書	国民教育の場として明治政府が重視した小学校の修身教科書に限定

(2) 調査過程で出現した第二の目的：調査を進める過程で、先行研究で言及されていない新たなグリム童話・イソップ寓話・日本昔話に関する有益な修身教科書テキストは見られなかった。一方で、二宮尊徳(二宮金次郎)のテキストが多数みられた。

そこで、国定修身教科書の基軸になっていく伝記と口承文芸との関連性を探る、という新たな目的を掲げて調査を行った。具体的には、修身教科書の素材に利用された口承文芸に関するイデオロギー分析の対比軸として、伝記資料の分析にも着手した。

3. 研究の方法

(1) 資料収集

明治初期の修身教科書を中心に資料を収集するため、図書館での調査を行った。

①平成25年度から平成27年度まで

次の手順で図書館の調査を行った。1) 国定以前の修身教科書の所在の確認、内容の調査、2) 修身教育素材として利用されている寓話、童話、昔話に関するテキストの入手、3) エートスに注目したテキスト分析、4) 同時に、東書文庫所蔵の文部省が付けた朱書き(重要文化財)、新聞や雑誌の投稿欄なども調査した。一次資料のテキストに現れたエートスを比較・考察することにより、資料の体系的な整理を行った。(具体的な分析方法は、次項(2)を参照。)

調査図書館は、主に次の三か所である。1) 東書文庫(東京都北区)：東京書籍株式会社附設教科書図書館 東書文庫とは、明治以前から現代の教科書まで約14万冊所有している国内有数の教科書専門図書館である(館内閲覧のみ)。文部省の検定の付箋や朱書きが残されている(重要文化財指定)。2) 早稲田大学図書館(東京都新宿区)。3) 国立国会図書館デジタルコレクションのデータベース。

②平成28年度

平成26年度から27年度は、調査先の耐震工事などにより、申請者が予定した時期に東書文庫での調査ができず、計画が変更になった。そのため、平成28年度は調査先を資料が入手しやすい図書館に変更し、伝記テキストを含めて資料収集を進めた。

(2) 分析方法

修身教科書のテキストをイデオロギー分析およびエートス(Ethos)に注目したテキスト分析の手法によって、新たに捉え直した。具体的には、エートスに注目したテキスト分析の方法を用いる。(マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1989、岩波文庫)で用いた方法を参照し、申請者が独自に工夫を加えたものである。) 具体的には次のようなものである。

① テキストから当時の修身教育イデオロギーを反映するキーセンテンスを抽出する。

② そこに含まれる道徳的規範-エートスを項目化し(例えば「労働」「家族」「愛国」等)、それに沿ってキーセンテンスを分類・分析する。

③ 修身教育イデオロギーと関係づけてテキストの全体的な意味を考察する。

この方法は、これまでも申請者の研究の基軸であり、今後も更に磨きをかけたい。本研究も同じ方法を用いて行い、国定前の修身教育

素材に関する一貫した体系的な研究へと繋げる。

4. 研究成果

(1) 明治期修身教科書の寓話・童話・昔話の変容および文部省の朱書き

開始当初から立てていた第一の目的である、明治期の小学校の修身教科書に掲載された寓話・童話・昔話(口承文芸)の資料収集と分析、および文部省がつけた朱書きの分析を試みた。その結果、小学校の修身教科書に掲載されたイソップ寓話・グリム童話・日本昔話については、先行研究で言及されていない新しいテキストは管見の限り見当たらなかった。

一方、修身教科書の素材としてグリム童話を利用しようとした樋口勘次郎の次の文献を入手することができた(日本昔話が掲載されている)。

【資料1】『尋常修身教科書入門』巻一、樋口勘次郎・野田瀧三郎、東京：金港堂、明34.5月14日印刷

【資料2】『尋常修身教科書入門』巻二、樋口勘次郎・野田瀧三郎、東京：金港堂、明34.5月14日印刷、同年5月17日発行

【資料3】『尋常修身教科書入門』巻二、樋口勘次郎・野田瀧三郎、東京：金港堂、明34.5月14日印刷、同年5月17日発行、同年7月23日訂正再版印刷、同年7月27日発行

資料1に文部省がつけた付箋の内容は、誤字の指摘であった。一方で資料2に文部省がつけた付箋の内容は、「大国主と大黒天を混ざるは不可」や「すさのをのみこと」の挿絵に描かれた「三つものたから(ママ)」の修正を指摘していた。つまり、付箋には日本の神話『古事記』『日本書紀』に関連する事項が多いと予測される。付箋の内容に関する分析は、今後追加調査し、論文として発表することを目指す。

(2) 二宮金次郎の変容

本研究の第二の目的である国定修身教科書の基軸になっていく伝記と口承文芸との関連性を探るため、まずは国定教科書以前の修身教科書に掲載された「二宮金次郎」のテキストをイデオロギー分析およびエートス(Ethos)に注目したテキスト分析の手法によって新たに分析した。そして、その変容について考察した。

明治20年代から30年代は近代日本の学校制度の確立期で、明治政府にとって特に小学校教育の必要性を国民に認識させることは重要な課題であった。こうした時代的背景から、当時の〈学校〉＝国民教育の場で使用す

る教科書に盛り込む素材をめぐって、様々なイデオロギー的立場が存在した。

まさにこの時期、多くの修身教科書の素材に伝記テキストが用いられた。中でも特に登場回数が多かった「二宮金次郎」は、明治37年以降の国定修身教科書で伝記テキストの基軸ともなり、勉強しながら〈労働する子ども〉のイメージを強力に植え付けていったと言えよう。イソップ寓話とこの伝記「二宮金次郎」が、修身教科書の中で〈労働〉というエートスで連結していた点は既に明らかになっている。(申請者、博士学位論文「修身教育の形成と近代的エートス—寓話・童話・昔話における〈子ども〉の役割—」名古屋大学、2012年7月)

そこで具体的には、次のような流れで「二宮金次郎」について分析を行った。まず、資料を収集した。次に、国定教科書前(検定期：明治20年代～30年代)の修身教科書に掲載された「二宮金次郎(尊徳)」のテキストと同時期に出現した学校外の「二宮金次郎(尊徳)」のテキストを比較し、二宮が体现した〈子ども〉像がどのように変容しているかを追った。

分析対象は、明治24年～36年(国定直前)の修身教科書(教員用掲載の「児童用本文」1冊含む)とした。また、比較対象として、教員用、学校外の児童向け読み物を取り上げた。

① 小学校修身教科書に掲載された二宮金次郎の変容

①-1) 明治24年25年の修身教科書を分析した結果、大人の二宮尊徳として描かれている場合が多くみられる。例えば、教育叢書『通俗修身談』(明治24)、『教育修身談』(明25)では、難しい漢字を交えながら、文章で二宮尊徳の一生について紹介されている。焦点は、学問をして役人になっただけにあり、幼年期は数行のみの記述である。また、『国民修身話』(明25)、『勅語修身訓画解説』(明25)、『尋常小学修身書教師用参考書』(明25)は冒頭に教育勅語が掲げられた教科書である。これらも二宮尊徳が役人になった大人の二宮金次郎の話が中心である。

①-2) 明治30年から33年の修身教科書を分析した結果、「二宮金次郎」は「孝行」話が増加している。「孝行」で取り上げられた例話の多くは「父を看病する／酒で励ます」話である。母と弟の話は「孝行」ではなく、「友愛」「慈仁」とされる傾向にある。例えば、『高等小学修身教典 生徒用』(明32)、『尋常小学単級修身訓 甲篇』(明33)など。

①-3) 明治34年の修身教科書を分析した結果、「二宮金次郎」の話には父と子の情愛が見られ、二宮金次郎の話が「孝行」の話として定

着しつつあることがわかる。例えば、『読書歴史修身事蹟図解説 第1集(二宮尊徳先生)』(明34)では、「時に先生、幼心にも父が病後の歩行を案じ、帰路の遅きを気遣い門に出で之を待つ、利右衛門[父:筆者補足]、醫師の義言を悦び、両手を舞して帰り来る先生、迎へて、「父上、何故に斯く喜び玉ふや、」と問ふ、父、云々と醫師にての様子を語り「かゝる次第にて我れ汝等を養育することを得たり、是を以て悦びに堪えず、」と答へけるとぞ、」(p.2)と、子を想う〈父〉と父を想う〈子〉が現れている。

「家族」という視点で明治期の修身教科書を分析した牟田和恵(1996、『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』、新曜社)は、明治の全期間を通して「孝の意味するところに顕著な変化」と「それ以外の親子関係の表象」が見られると述べ、「孝行」が「親子の対等な情愛と家族の幸福に関わるものとして出現する」典型に二宮金次郎の話を挙げている(pp.88-91)。上記、この流れを裏付ける結果となった。

②明治30年代の学校外の読み物に掲載された「二宮金次郎」

②-1)明治34年の修身教科書に父と子の情愛が見られた同時期に、学校外の読み物では父子の話の「孝行」よりも、父母が「育てる」というキーワードが頻出し、学校の外では家庭における〈子ども〉として二宮が出現していることが分かる。

例えば、『二宮尊徳:家庭読本 第1編』(明34)では、「二親は金次郎兄弟を可愛がる事深く、自分等は食はずとも、金次郎等に食はせ自分等は着はずとも金次郎等に着するやうにして大切に育てしかば、子供らはいと健に育ちて、…略…『御父様御母様』となじみ親しみて、…略…貧しき中にも楽しく暮らした…以下略」(pp.3-4)や、『御迎に行つて見ませう。』と駆け出す金次郎が門を出ると父はさも嬉しさうに打笑ひ両手をふりながら帰り来りて金次郎の頭を撫で」(pp.8-9)と、父と母による〈子〉への愛情が現れている。

また、学校外の読み物では、「孝行」を教える例話が、父の話から母の話へ移行する傾向がみられ、「二宮金次郎」と「家庭」「団欒」の連結が現れていた。例えば、『高等小学校外修身書 第3編 卷1』(明37)では、序で学校の復習として書いた書物であると明言されており、冒頭に「家庭心得」「家庭団欒」という節が設けられ、親子の「楽しみ」が説明されている。また、「母は世にもたのもしき、金次郎が言を聞きまして、…略…かはゆいわが子を、かき抱き、早速はせかへつて、親子四人顔を合わせたうれしさは、何に譬へんよ一もなきよ一に見えました。」(p.27)という母が子を想う情景が描かれ、全体を通し

て〈母〉と〈子〉の連結が見られる。

②-2)明治40年前後には、〈子〉が家で〈母〉に話すお話として二宮金次郎が登場している。例えば、『面白い読本 家庭復習 尋常 第3学年』(明41)では、「文吉郎といふ兒があつた、學校からかへつて、本のおけいこを、してをりますと、おかあさんが、金次郎のはなしを、ききたいと、いひますので、文吉郎は、はなしました」(p.17)と、家庭の教育を担当する母と子どもを「二宮金次郎」の話が繋いでいる。換言すれば、明治後期の時点で「二宮金次郎」は学校と家庭の両者で共通する道徳的教材として定着しつつあるといえよう。この点は、国定修身教科書第1期(明37)、第2期(明44)で母の話のみ(「孝行」)になったこととの関連が示唆されよう。

以上、本研究の第二の目的である国定修身教科書の基軸になっていく伝記と口承文芸との関連性を探るため、まずは国定教科書前の伝記「二宮金次郎」のテキストを新たに分析した。そして、その変容について考察した。

その結果、先行研究で牟田(1996)が指摘していたような「孝行」が内包する意味合いの変化が見て取れた。さらに、牟田の指摘だけでなく、以下の点も明らかとなった。

【修身教科書】明24:大人の二宮—明30:父の看病—明34:父と子の情愛—明36以降:国定教科書は母と子

【学校外】明34~41:母と子の情愛

要するに、明治30年から修身教科書では父を看病する〈子ども〉が模範として描かれ、明治34年になるとその関係の中に〈父—子〉の情愛が読み取れるようになる。その一方で、同時の学校外テキストでは孝行な〈子ども〉が〈父—子〉から〈母—子〉へと結びつきを強めていくことが明らかになった。

したがって、二宮金次郎の伝記を通して体现された模範的な〈子ども〉像は、学校で示される「父を看病する/喜ばせる」行為から家庭での「母を喜ばせる」行為に重点が移行していると言える。その背後に「家庭」の出現があることは言うまでもない。国定教科書における二宮金次郎が〈母〉を思いやる〈子〉として描かれた背景には、こうした学校の外にある「家庭教育」における「二宮金次郎」の影響もあると推察される。したがって、二宮が「労働」以外にも「家庭」の形成というイデオロギー的装置としても機能していたといえる。

一方で、明治30年代の修身教科書の中で、二宮金次郎の「家業/農作業」と「学問」をする子どもの〈労働〉エートスとイソップ寓話「蟻とキリギリス」の「蟻」の労働を連結させていたことが分かっている(申請者、2012他)。上述した本研究がとらえた二宮金

次郎の変容と突き合わせてみると、「労働」と「家庭」の狭間で修身教科書の〈子ども〉が形成されていることが分かる。

以上、上記「二宮金次郎」の変容の一側面が具体的に解明されたことで、本研究の第二の目的である国定修身教科書の基軸になっていく伝記と口承文芸との関連性を探るといふ点を検証するための、伝記側の資料を整えることができた。両者の関連性については今後詳細な検証を行い、論文として公開できることを目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

- ① 坂本 麻裕子、明治期の修身教科書にあらわれた模範的子ども像—伝記テキストの分析—、アジア教育史学会 (2015 年度第 3 回定例研究会)、2016. 2. 27、中部大学 (愛知県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 麻裕子 (SAKAMOTO, Mayuko)
早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・助教
研究者番号：40648317

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者

該当者なし

(4) 研究協力者

該当者なし